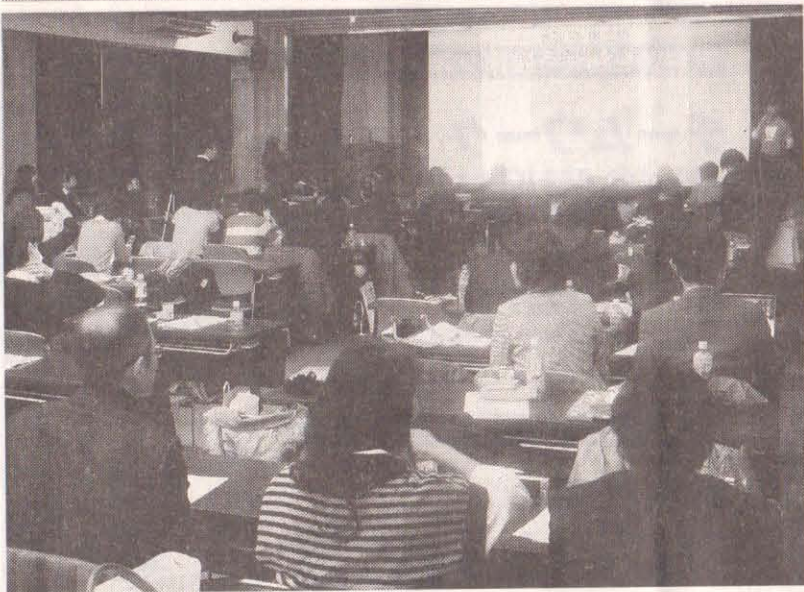


気仙沼・南三陸 「食べる」取り組み報告会



全国から130人を超える参加者が集まった報告会

「気仙沼・南三陸『食べる』取り組み報告会」が、気仙沼歯科医師会と気仙沼・南三陸「食べる」取り組み研究会の共催により2月10日、宮城県歯科医師会館(仙台市)で開催された。

地元宮城を始め、南は長崎県対馬、北は札幌など全国から医師、歯科医師、看護師、歯科衛生士、言語聴覚士、理学療法士、栄養士など約130人が参加、これまでの成果を総括するとともに、現状の問題点、今後の展望などを共有し一層の連携強化を確認した。さらに、震災後2年を経て、被災地が外部からの支援に頼りきらず「自立」を目指す動きに支援者が協働するという段階に入り、全国的にみても先進的なシステムが確立しつつあるのを印象付ける報告会となった。

菅野健気仙沼歯会長、細

谷仁憲宮城県歯会長のあいさつの後、講演では、震災直後よりこの地域で支援活動に携わり、各医療・介護施設、職種、団体間の調整役として活躍する古屋聡山梨市立牧丘病院長が、このエリアの「食べる」取り組みと支援状況の概況について、震災前から現在までを時系列で話した。

古屋氏は、避難所での緊

最新の歯科情報は LDAから



Leading Dentists Association

東京都千代田区三崎町2-15-2 JDNビル

TEL: 03(3234)2475 FAX: 03(3234)2477

www.LDA-online.com

地の医療従事者が受動的な被支援者ではなく、能動的に医療環境を取り戻そうとする姿が印象的だった。最後は指定発言として、地域の中核病院であり古屋氏の活動拠点でもある川島実気仙沼市立本吉病院長と、このエリアでの摂食嚥下指導普及のリーダーである小山珠美看護師(東名厚木病院摂食・嚥下療法部課長/チームオレンジ)がコメントし、金澤洋気仙沼歯科医師会地域連携室長(前気仙沼歯科医師会会長)によるまとめの言葉で閉幕した。

震災後2年を経た現在、医療現場での支援も震災直後とは異なった形に発展してきている。高齢化率30%超と全国平均を大きく上回り、震災前から医療資源が豊かとはいえなかったこの地域は今でもハード面で厳しい状況にある。地域の医療関係者と支援者たちは震災による医療システムの消失から復活する過程で「被災地の自立」を視野に入れ、施設・職種を超えた密接な連携を構築してきたのに驚きと称賛を禁じ得ない。

報告会終了後、古屋氏よりエリア内の各医療・福祉施設(病院2・特養2・老健2・訪問看護ステーション1・歯科医院1)と、それらを継続的に支援してきた外部の医療機関、NPO、大学(計5機関)などが胃ろうや経管栄養から脱し、患者と家族の「口から食べたい」という願いをどのように実現してきたかを報告。被災